

第8回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「あめふるとき」

千葉県 東京学館高等学校 1年 葛生明日香



賢治のまちから
高校生★童話大賞



優秀賞 〈銀の星賞〉

『あめふるとき』

千葉県 東京学館高等学校 一年 葛生明日香

空から落ちる この雨は

何かを求める龍の声

怒りに任せて 雷はなち

喜びたたえて 虹架ける

雨は龍の心を映し

今日もどこかで 歌うたう

びた、と指揮棒が止まった。そして、次の瞬間、譜面台に叩きつけられる。

「違う！ そうじゃない！」

先生の怒鳴り声に、私はびくんと体を震わせた。

「——すいません」

今まで吹いていたフルートから口を離して、小さな声で私は謝る。とてもじゃないが、恐くて、目を合わせることは出来ない。

放課後の音楽室。今日は、私たち吹奏楽部のメンバーが集まって、合奏をする日だった。

運の悪い事に、私の座っている席は先生の真正面で、しかもコンクールでソロを吹く事になっていた。

「亜衣、あのな。そこは、サリーって言う女の子が、叶わない恋に落ちるシーンで流れるソロなんだ。うまいんだから、もっと感情を込めなさい！

君のには、感情はこもっていないんだ」

「はい……」



けれど、そんなことを言われても、私にはよく理解できなかった。『叶わない恋』だなんて、経験がない。そもそも、恋愛経験すらないのだ。

「じゃあ、もう一度同じところから」

陰鬱な気持ちで、私はフルートを構えた。

指揮棒が再び動き出す。

「そんなに落ち込むなって。先生だって、コンクールが近くて気が立っているんだよ」

帰り道。親友の理絵が、励ましてくれた。彼女も同じ吹奏楽部で、トランペットを吹いている。

「でもなあ」

と、私はため息をつく。それでも、私には何かが足りないんだろう。だから、先生もあんなに怒るのだ。

「理絵、私のソロ、どう思った?」

「え?」

唐突に尋ねた私に、理絵は聞きかえす。

「どう思った? 私のソロ。正直なところ」

理絵は、ちょっと困ったように笑って、

「うーん……。良かった、と思うよ。すごくうまいし。うん。私には、先生がどうしてあんなに怒るのが良くわからないもん!」

最後は力強く言った。

「そっか……。ありがとう」

笑顔を作って、私は理絵に言った。

でも、それにはどこか無理があったのだらう。理絵は少し心配そうな顔を
をして、

「無理しないでね? ——あ、そうだ! 駅前に、おいしいパン屋さんを



見つけたんだけど、これから一緒に行かない？」

と誘ってくれた。私は行きたい誘惑に駆られたが、「今日は遠慮しておく。誘ってくれてありがとうね」

と首を振った。少し残念そうな顔をした理絵に、私は少しおどけてつけたした。

「叶わない恋について、研究しなくちゃ」

それを聞いて、理絵はにっこり笑う。

「あははっ！ そっか、頑張れ。私で出来ることなら、何でも言ってね。」

——何なら、かっこいい男の子でも紹介してあげようか？」

「気持ちだけでもらっておきます。——じゃ、ここで」

「あ、うん。またねー」

駅へ向かう理絵と別れ、私はそのまま細かい分かれ道へ入っていった。私の家は、たいして遠くないので、私は歩いて学校まで通っている。

少し歩いてから、私は再びため息をついた。

理絵にはああ言ったものの、私は途方にくれていた。コンクールはもうすぐなのだ。やはり、自分にできる限りの演奏がしたい。

そう思っていたときに、ぽつん、と鼻先に水が降ってきた。

続けて、何粒も。

「えっ！ こんな所で雨なんて」

空を見上げてみれば、先程まで晴れていた空が、どんよりと曇っている。いつの間にこんな雲がやってきたのだろうか。まるでそれは、私の心を映しているかのようだった。

雨の粒は大きく、これから激しくなりそうだ。そう思った私は、はっと手に持ったフルートを見た。まずい。楽器はデリケートなのだ。濡らしたらよくない。

あいにく、天気予報では一日中晴れとの予想だったので、傘は持ってきて



ていない。

私は、走り出した。確か、この先の林に、小さな神社があったはずだ。あそこで雨宿りをしよう。

何とか、びしょぬれになる前に神社へとたどり着いた。軒の下に立って、空へと目を向ける。

雨は激しくなるばかりだ。雲の切れ目が見つからないので、まだしばらくは降り続けるだろう。

ピカッ！

稲妻が空に走った。

「わあ……」

ゴロゴロゴロオン！

「きやつ！」

綺麗な稲妻に見とれた瞬間に、大きな雷鳴が轟く。相当近い。

雨が一層強くなる。

「どうしよう……」

続けて何度も雷が鳴った。この大きさだと、きつとどこかに落ちたに違いない。

そのとき、ピカッと光って、ほぼ同時に音が聞こえた。それも、すぐそばで。

「きゃあ！」

すぐそばに、雷が落ちたのだ。私はくるであろう衝撃を思い、覚悟を決めた。

「……………」

唐突に、辺りが静かになった。雨音も、雷の音も聞こえない。

私は恐る恐る頭を上げる。

そこは、神社だった。先程まで私がいたはずの場所。しかし、その雰



気は打って変わって、なんと言うか……、澄み切った印象を受けた。

先程まであんなに暗く、稲妻が飛び交っていたのが嘘のように、あたりは明るく、神秘的な木漏れ日が差し込んでいた。鳥居のすぐ前に舗装された道があったはずなのだが、鳥居自体が見つからない。やけに広くなった林の中を、延々と石畳の道が続いているだけだ。

その神聖な空気の中、私は何も言えずに立ち尽くしていた。

ここは、どこ？ そんな問いが、喉まででかかった。

「――」

そのとき、私の耳に、声が届いた。綺麗な澄んだ声で、湧き水を思い出させるような声。その声は、歌を歌っていた。

「――綺麗な歌……」

私は、先程までの戸惑いをすっかり忘れ、その声に聞きほれた。

「――誰か答えて この声に

誰か歌って この僕へ

僕は独り 誰もいない

僕は独り 誰か来て――」

歌詞はめちゃくちゃだったが、少し哀しそうな声で、旋律はとても綺麗だった。

よく聞いて見ると、その声は私のすぐそば、小さな神社の中から聞こえる。

私は好奇心にかられて、恐る恐るその建物の扉を開こうとした。

「誰だ!？」

突然、低い男の声をして、私は飛び上がる。先程見たときには、周りに誰もいなかったはずだ。

訳がわからないうちに、私は脇から体当たりをくらう。そして、その声の主は、倒れた私の上ののって、私の顔を見た。



「何者だ？」

低い声でそう唸ったのは、犬だった。いや、狼かもしれない。狂暴な目つきで私を睨む。

「答えろ」

そのすぐ脇から、別の低い声がした。そっくりな犬がもう一匹出てきて、私へと問いかける。

私は、答えられなかった。今起きている事が、さっぱり理解できなかった。「どうしたの？」

今にも食べられそうな雰囲気の中、ガラスのような声が響き渡った。

「竜神様。侵入者です」

私から降りて、二匹の犬は頭をその声の主へと下げる。

竜神様？ 私は、ゆっくりと起き上がってその人を見た。

「わあ……」

思わず感嘆の声が出るほど、その竜神と呼ばれた少年は、現実離れたはかなげな少年だった。平安時代の貴族のような、白い狩衣をまとって、紺色に近い黒髪を肩まで伸ばしている。

その少年は、その金色の瞳を私に向けて、

「だれ？」

と静かな声でそう尋ねた。

「……………」

私は、その少年の顔に見とれていて、問いに答えることを忘れていた。

「だれなの？」

もう一度聞かれて、私はハツとして答える。

「えっと、私は亜衣です」

それでも、その少年の顔から目が離せなかった。

「二人とも、下がっていいよ」



少年は、二匹の犬にそう命じる。

「しかし……」

「竜神様……」

二匹の犬は渋った。

「下がって。僕は、亜衣とお話がしたい」

「はい」

最後に私を睨みながら、二匹の犬は石の台にのぼり、次の瞬間、そこには狛犬が座っていた。

「あ……狛犬だったんだ……」

「うん。彼らは、僕を守ってくれているの」

いつの間にかすぐそばに来ていた少年に、亜衣は驚く。何の音もしなかった。

年は、私と同じくらいだろうか。平安時代の貴族のような優雅な身こなしだ。

「さっき歌っていたのは、あなた？」

私は尋ねてみる。不思議なものだ。不思議な事が起こりすぎると、不思議なことを不思議だと思わなくなるらしい。

少年はこくんとうなずいた。私は立ちあがって、

「あなたの名前は？」

と尋ねた。少年は、澄んだ瞳を閉じて首を振る。

「竜神さま」

「そうじゃなくて……愛称とか、自分自身の名前のこと」

「もう、彼らしか僕のことを呼ばなくなったから、忘れてしまった」

彼らとは、狛犬たちのことだろう。

じゃあ、とその暗い気持ちを吹き飛ばしたくて、私はわざと明るく言う。

「じゃあ、私は『しおん』って呼んでもいいかな？」



しおん。薄紫色だと何かの本で読んだ気がする。

少年は、目を見開いて黙った。それを見て、とたんに私は不安になる。勝手すぎたかもしれない。

「あ、ごめん。突然変なこと言って」

私が謝ると、少年は首を振った。

「ううん。うれしい。僕は、誰かに名前を呼ばれる事がなくなってしまったから」

そういって、笑顔になった。私は、それを見て嬉しくなる。

「良かった。しおんが喜んでくれて」

私は早速その名前を使う。しおんが、くすぐったそうに笑った。

「ねえ、しおんは神様なの？」

すっかり緊張が解けた私は、疑問に思ったことを尋ねる。

「わからない。そう呼ばれていたこともあったけれど、今は、誰も僕を知らない」

「え……？」

よくわからなかった私は、首をかしげた。

「僕はね、ここで歌をうたうのが仕事なの。僕の声は、雨になって地上に降りそそぐ。昔は、僕の歌に、植物たちが、動物たちが、そして人間たちが答えてくれた。でも……」

言いながら、彼の目から涙がこぼれる。

「今は、誰の声も聞こえない」

しおんを見ていて、私は、言いようのない悲しみを感じた。

「皆ね、知らない言葉をしゃべるの。知らない言葉で、しゃべっていて、それがうるさくて、他の声が聞こえないの。人もあまり来ない。僕は……独りなの」

私の中で、何かが叫ぶ。それは違う、と。



「今は、私がおここにいるよ。しおんのことを知っているよ」

私はしおんに声をかけた。

「うん……。きてくれて、有難う、亜衣」

しおんは、本当に子供みたいな少年だった。竜神といわれているからには、相当長い時間を過ごしてきたのだろう。でも、無垢のまま、こうして歌を独りで歌ってきたのだ。

そのとき、唐突に私は理解した。ああそうか、この気持ちなんだ、と。

叶わぬ恋。私は、しおんを好きだと感じている。

「僕ね、人間になりたいんだ」

ごしごしと涙を拭いて、しおんは告げた。独りでここにいるのは嫌だから、と。私も、彼が人間になってくれたら、どれだけいいかと思う。

その声を聞いた途端、狛犬たちが動いた。

「なりません」

「それはゆるされないことです」

しおんは、再び泣きそうになる。

「何故？ 誰も答えてくれないのに？」

「それが仕事だからです」

狛犬は、石のように感情がない言葉を言った。

しおんは、顔を歪め、泣き出しそうになる。それを何とかこらえ、しおんは私を見た。

私は何て言ったらよいのか見当もつかなかった。それから、視線をあたりにさまよわせて、自分のフルートが落ちている事に気がついた。あれはデリケートなのに。

「そうだ。私のフルートを聴いてくれない？」

私には、しおんをどうすることも出来ないから。

「まあ、たいした力量じゃないんだけど」



フルートを取り出して、私は音を出す。それは、この神秘的な空間に響いた。そして、あの、先生にしかられたソコの部分を吹き始める。しおんのために。最後の音を吹ききって、私はしおんの顔を見た。

「あ……」

しおんは涙をぼろぼろとこぼしていた。

「ねえ、亜衣。僕がここを出られないのなら、亜衣がここにいて」

「それは……」

どう答えればいいのか、私にはわからなかった。正直、この場所にいたいと思っただけで、それが許されることなのか、私にはわからなかった。

「それは、いけません」

「このものにも帰る場所があります」

狛犬たちが言う。

「行かないで！ 僕を独りにしないで！」

その言葉は、私の胸に深く突き刺さった。

「ごめんね……」

私は謝る。

「私は、ここには残れないと思う。だけど、その代わり、しおんのためにフルートを吹くよ。たくさん。それじゃあ、ダメかな？」

しおんは悲しそうに顔を歪めて、座り込む。

「わかったよ……」

そう言いながら、しおんは私のフルートに手を触れた。

それから、涙を拭いて、顔を上げる。

「必ずだよ。僕は、聞いているから——」

その瞬間、再び雷の音がすぐそばで聞こえて、雨音が戻ってきた。

神秘的な空気は消え、いつもの神社に戻っていた。狛犬は、本当の石に。

神社の中には誰もいない。私は、手に持ったままのフルートを見つめた。



そして、そのフルートを、しおんのために吹き始めた。

小雨が降っていた。

私のフルートの音は、音楽室の中に響き渡った。

指揮棒が、止まる。私は、再び怒鳴られるのかと思って、身構えた。

「うん、感情がこもっていて、良かったよ。その調子で、本番も頑張ってくれ」

先生は、それだけ言って、じゃあ次の場所から、と指揮棒を振り始めた。

私は、フルートを吹きながら、微笑む。

しおんのために吹くフルート。今まではコンクールのためにだけ吹いていたけれど、今の私には『しおんのために吹く』という気持ちがある。

叶わぬ恋。私のフルートの音を、しおんは聞いてくれるだろうか？

窓から見える空はいつの間にか晴れ、虹がかかっていた。

空から落ちる この雨は

何かを求める龍の声

怒りに任せて 雷はなち

喜びたたえて 虹架ける

雨は龍の心を映し

今日もどこかで 歌うたう